ヨコハマアートサイト
Yokohama Art Site

特集

語り継ぐことから

NPO法人ぷかぷか「アート屋わんど」にて作品制作のようす

vol. 032
2022

特集

語り継ぐことから

a.

b.

レポート1

NPO 法人ぷかぷか

障害のある人もない人も共に働く

ファンがつく接客

緑豊かでのどかな霧が丘団地の一角に、色鮮やかに描かれた看板を掲げるお店が立ち並ぶ。NPO 法人ぷかぷかが運営する、パン屋さん、アート工房、お惣菜屋さん、食堂だ。そこには障害のある人もない人も一緒に一生懸命働く姿がみられる。どこかゆったりとした時間のなか、それぞれが自分のペースで楽しく仕事をしているようだ。お客さんが店に立ち寄ると、そこで働くメンバーたちが「どこから来たの?」などと声をかけてくれる。そして、好きなものの名前を何十個も教えてくれたり、工房で描いた絵やアルバムをそっと見せてくれたりする。

店に来るお客さんを前に「ほら、あなたのファンが待っているよ」とメンバーに声をかけるのは理事長の高崎明さん。「ぷかぷかがオープンした当初は接客の言葉遣いを練習したんですが、違和感があって。そこで思い切って自由に接客をしてもらったら、それを「好きだ」と言ってくれる人が現れたんです」。

メンバーに会いたくて店を訪れる人も少なくないという。

仕事の面白さを感じられる場

ぷかぷかでは日々、提供するサービスや商品の品質向上に取り組むと同時に、「仕事」の面白さを大事にしている。高崎さんは、障害のある人がつくったから買うのではなく、美味しいから買うということが重要だと語る。「どうすれば売れるのか、なぜ売れたのかを考え、それに向けて頑張ってみる。出来ないことに目を向けるのではな

受け継いだものを、

今生きているひとから未来に向けて、伝えていく。

言葉や表現を通して「語り継ぐ」みなさんにお話を聞きました。

レポート1 NPO法人ぷかぷか

レポート2 金沢区舞台芸術サークル「潮の音」

レポート3 華僑研究と塾「寺子屋」

d.

c.

a. 左から、作品制作・販売を行う「アート屋わんど」、弁当・総菜を販売する「おひさまの台所」、パンを販売する「ベーカリーぷかぷか」。（数メートルはなれたところに食堂「ぷかぷかさんのおひるごはん」がある）。

b. パンをつくるようす

c. 惣菜をつくるようす

d. 理事長の高崎明さん

く、出来ること、やりたいことを活かす。ここで働くメンバーには売り上げなどの成果を伝え、それぞれ自分なりのペースで挑戦をしてもらっています。それは私たち職員も同じです。仕事のやりがいとそれを互いに見守る雰囲気が大事です」。食堂で出されるランチは身体に優しい食材でつくられた丁寧な味。店内にはグルメ雑誌に掲載された記事が誇らしげに飾られていた。

「忘れない」を超えて

今から6年前、津久井やまゆり園で起きた障害者殺傷事件のことを、高崎さんは250本以上のブログ記事で思いをつづり、「ぷかぷか上映会」など事件を考えるイベントも行ってきた。あるきっかけに、被害者のひとりである「美帆ちゃん」のお母さんがぷかぷかを訪れるようになった。美帆ちゃんのお母さんは、生き生きと過ごすメンバーと触れ合うなかで、次第に笑顔を取り戻していったという。

なかでも美帆ちゃんのお母さんが楽しみにしているのは年に一度、開催される演劇公演だ。舞台は、突拍子もないアイディアや、予定調和に収まらない即興性に満ち、彼／彼女らの魅力が詰まっているという。コロナ禍により3年ぶりの上演となる今年は、宮沢賢治の《銀河鉄道の夜》を原作とする。内容は構想中だが、ここにはいない人のことも含め、これまで出会った人との楽しい思い出を銀河鉄道に乗せるイメージで制作する。高崎さんは「事件を忘れないというだけではなく、彼／彼女らが確かに生きていたことを語り継ぎ、今を生きる人が次につなげることが大事です」と語る。力強く今を生きる姿が、過去を超え、未来につながっていく。

NPO 法人ぷかぷか
横浜市緑区霧が丘3-25-2-203（カフェベーカリーぷかぷか）
https://www.pukapuka.or.jp

レポート2

金沢区舞台芸術サークル「潮の音」

民話を舞台で表現する

たくさんの民話と歴史遺産

「金沢区には100話ほどの民話があると言われています」。こう語るのは、金沢区舞台芸術サークル「潮の音」代表の滝澤右弥子（ゆみこ）さん。「潮の音」はこれまで14年にわたって、演劇や和楽器、舞踊などを使った舞台芸術で金沢区の民話を表現してきた。小さな子どもたちとシニアのメンバーが、目一杯の力を合わせて一つの舞台をつくりあげている。

今年取り組んだ演目は「蒲（かば）と亀」。蒲殿と呼ばれた源範頼（みなもとののりより）とその妻・亀の物語だ。物語では助けてくれた漁師に蒲という苗字をあげるシーンも描かれるが、今もこの地域には蒲（かば）さんや蒲谷（かばや）さんという方が多いそうだ。滝澤さんは「金沢区には歴史遺産がたくさんあります。そして、そこにはいつも民話があるんです。地元の人でも民話を知らない人が多いのですが、地元の土地と歴史がつながるととても面白いものです。民話を通して郷土愛を育んでもらえたらと思います。特に子どもたちには日本的な情緒にも触れてほしいです」と語る。

地域の技が集まって

舞台を支える大人たちはお琴、尺八、日本舞踊、三線、詩吟、水墨画、美術、ピアノなど多彩な技をもっているが、彼／彼女らは実は金沢区の「街の先生」だ。これは区民の生涯学習のための制度で、豊かな経験や技術を活かして指導できる先生が集まる。もともとあった民話を演劇で表現するグループが解散となり、その意思を引き継ごうと立ち上がったのが「潮の音」だ。それに賛同して集まったのが「街の先生」たちだった。演劇については素人だったが、みんなの技を持ち寄ってなんとか頑張ってきた。しかし団体はいま高齢化の傾向にある。「介護や体の不調で参加が難しい方も出てきましたが、潮の音はいつでも扉を開けてお帰りを待っています。同時に新しい参加者も大歓迎です！元気がもらえる場ですよ」。「潮の音」は民話をつなぐ担い手を募集中。舞台を通して多世代のかかわりが出来る場をつくり続けるのが目標だ。

a.

b.

c.

a. 演劇ワークショップのようす。
b. 滝澤さんと子どもたち。
c. 公演本番、エンディング曲を歌うようす。

金沢区舞台芸術サークル「潮の音」
https://shionone.jimdofree.com

レポート3

華僑研究と塾「寺子屋」

共に学ぶ場で育む

自身のルーツを知ることから

横浜中華街、一階に中華料理店のある建物の4階に塾「寺子屋」はある。夏休みの午後、少しづつ子どもたちが集まると、代表の符順和（ふじゅんわ）さんが出迎える。横浜山手中華学校の教師を務めていた符さんは、保護者からの要望も厚く、定年退職後、この寺子屋を開いた。部屋には勉強道具もあれば、マンガもあり、子どもたちの生活が見える落ち着く空間だ。その奥の壁一面にびっしりと並ぶ文献。これは符さんが集めた華僑（かつて中国に生まれ、移住した人やその子孫）にまつわる資料だ。

日本人の母と中国人の父の間に生まれ、日本で育った符さん。自身のルーツを知るために始めた活動が、華僑史研究につながる。転機になったのは研究者・伊藤泉美さんと出会い、老華僑への聞き書きに参加したことだ。その記録は「横浜華僑の記憶－横浜華僑口述歴史記録集」（2010年、財団法人中華会館・横浜開港資料館）にまとめられている。「華僑は自分が苦労した話をなかなかしません。家族であっても親の過去を知らないことがほとんどです。けれども、この取材がその重い口を開くきっかけになりました」。

それぞれの記憶と歴史

口述記録では、関東大震災や戦時中の生活などについて11人それぞれの視点から話がまとめられている。符さんは「その時々に、どこにいたのかによって、歴史の捉え方は変わると思います。だから自分と違う考え方の人のことを一概に否定することはできないんです。私も、もし学校事件が起きたあのときに別の学校に行っていたら、違った考え方を持っていたかもしれません」と語る。

1952年、符さんが小学校3年生の時に起こった学校事件により校舎は閉鎖された。その後、横浜山手中華学校と横浜中華学院が設立し、これまで同じ学校に通っていた子どもたちは別々の道を歩むことになった。

いま、塾「寺子屋」にはその両方の学校から子どもたちが集まり、共に学んでいる。「ここは子どもたちの居場所にしたいと思っています」。子どもたちに「アイスたべる？おやつの時間にはお菓子もあるよ」と声をかける符さん。優しい表情を浮かべ「どちらかというと過保護な先生です」と笑った。

a.

b.

a. 符順和さん
b. 塾「寺子屋」のようす

塾「寺子屋」
横浜市中区山下町221 福建会館4階

取材前、語り継ぐというとじっと静かに歴史に向き合うようなイメージがあった。しかし、現場にお伺いしてみると、過去の話をつい最近のことのように話しながら、そこに集うみなさんと共に今につなげ、現在をにぎやかに楽しんでいる。過去から未来へと、ゆるやかに手渡していく場がそこにあった。

ヨコハマアートサイト2022プロジェクト進行中

ヨコハマアートサイト2022では7月1日～翌1月31日にかけて、横浜の各地域でさまざまなアートイベントが行われます。今年度の活動にも、ぜひご注目ください。

ヨコハマアートサイトは、地域資源の魅力を引き出し、開催地域内外のにぎわいを創出する「アートフェスティバル」、福祉・環境・まちづくり・国際交流等における地域課題にアプローチする「コミュニティアート」、横浜の歴史や自然、景観などに着目し、横浜の魅力を市内外へ発信する「アートプロジェクト」の3つをテーマとした文化芸術活動を支援するプロジェクトです。今年度のヨコハマアートサイトは、応募件数が65件と過去最多でした。その中から33件の事業の参加が決定しました。

子育て中の保護者や子どもたちにかかわる事業では、ひとり親家庭や障害のある子ども、またその保護者が気軽に集まれるアートスペースを開く「NPO法人スペースナナ」、保護者や子どもが安心できる環境で、乳幼児向けのパフォーマンスを行う「to R mansion」、アート作品づくりやディスカッションを通して、子どもたちの感受性を引き出し、社会や自分自身について考える機会をつくる「Edu Art」などが参加します。また、都筑民家園を舞台に障害のある人や福祉関係者、不登校の子どもたち、循環木材を利用するアーティストがさまざまなアート作品の展示や販売、ワークショップなどを開催するイベントを行う「ROJIURARt実行委員会」、地域内外の人に親しみをもってもらうため音楽を通した活動を行う「六角橋商店街連合会」、市民と共に金沢区の民話を演劇を通して表現する「金沢区舞台芸術サークル「潮の音」など、地域の魅力の発見・創出に挑戦する団体も多くあります。地域課題・社会課題にアプローチする事業では、ダンスを通して路上生活経験者を含む人たちが共に表現を行う「任意団体アオキカク」や、気軽に立ち寄る感覚で音楽に出会い、地域のゆるやかなつながりを創出する「まちなか立寄楽団」など、ふだんは接点が少ないと思われがちなさまざまな人たちが身体や音楽を通して、共に表現を行う活動に取り組みます。

ご紹介したほかにもさまざまな団体が参加します。今年は参加団体も増え、さらなる展開が期待されるヨコハマアートサイト。横浜の各地域で活動が行われます。ぜひ一度、イベントに訪れてみてください。

金沢区舞台芸術サークル「潮の音」

任意団体アオキカク
（撮影：岡本千尋）

EduArt
（撮影：Sam Spicer）

ROJIURARt 実行委員会

まちなか立寄楽団
（撮影：川瀬和美）

to R mansion
（撮影：金子愛帆）

NPO法人スペースナナ

六角橋商店街連合会

左：沖縄・石垣島の海・ハイビスカス・夕日、山梨・勝沼の桃園とぶどう寺・なまはげの立像、山形・地酒と山寺、北海道・美瑛 パッチワークの丘…
右：肢体不自由児・者と家族のためのおでかけマインド発信マガジン「よこはま Ist」、「とうきょう Ist」、「せんだい Ist」

～ココロとカラダを元気にする旅のススメ～

寄稿：**佐塚 玲子**

ヨコハマアートサイト2022の選考委員会のメンバーで、
特定非営利活動法人よこはま地域福祉研究センター 副理事長・センター長の佐塚玲子さんが、
旅やおでかけから見えてくる地域の文化についてお話をしてくださいました！

今年の夏、どのように過ごされましたか？ 私は、新型コロナまん延防止が規制緩和となり、解き放たれたように旅に出ました。沖縄離島の旅から始まり、南は沖縄、北は北海道、自然を満喫し、まちを歩き、人に触れ、食やお酒を楽しみました。また、歴史的建物や偉人を学び、人々の郷土への誇りや愛着を知りました。親しみや尊敬の気持ちとともに、いつの間にか、心も身体も元気チャージ！ 旅ってやっぱり大切です。

２０１５年からの３年間、障害のある人も、自然の中や、まちの中に繰り出し、いろいろな出会いや経験を得られるようにという思いから、「（Ｉ）いっしょに・（Ｓ）そとで・（Ｔ）たのしもう！」をテーマに、肢体不自由児・者と家族のためのおでかけマインド発信マガジン「Ｉｓｔ」を制作しました。ページを開くと、お出かけ好きの皆さんの笑顔が満載で、楽しかった取材を思い出します。自然が大好きな高１男子が沖縄の海で気持ちよさそうに過ごす姿や、みなとみらいが大好きな中２男子が、お出かけ用のジーンズを履きたいとタンスの前にすわりこむ姿もあります。車いすに乗って、さまざまな場所へおでかけする彼ら／彼女らは、みんな活き活きしていました！

コロナ禍の影響を受けて、身近な外出さえ制限を受けるなか、待っていたかのように迎えてくれた地域・社会には一様に懐の深さを感じます。自然や歴史とともに、「文化」は誰もが幸せに生きるために育まれた個性豊かな知恵と営みの総体として、癒しや感動を与えてくれます。私たちはたんなる訪問者ではなく、そんな「文化」に触れる喜びを享受しつつ、その地域の人と共に、「文化」を守り、継承する役割と、さらなる文化を創造していく一員にもなっているように思います。

久しぶりに３冊の「Ｉｓｔ」を手に取り、私の旅好きも「誰もがどんな場所でも共に生きられる社会を目指す」気持ちも変わっていないことに気づきます。「いっしょに・そとで・たのしもう！」。今、一層、その想いは強くなっています。

さつか れいこ　特定非営利活動法人よこはま地域福祉研究センター副理事長・センター長

人と地域のしあわせを考え・行動する研究センターを設立して10年。たくさんの人と地域に出会い、対話を重ね取り組みを広げ、深める仕事が大好きです。元気に働くためには元気に遊ぶ！がモットー。次はどんなお出かけしようか？ ワクワク旅を思案中です。

事務局うろうろ日記

ヨコハマアートサイト事務局は、今日も横浜市内の
あっちこっちへうろうろしています。

7月28日木曜日
横浜市民ギャラリーにて「横浜市こどもの美術展2022」を観る。美術館の展示室に、公募で集まった子どもたちが描いた絵が並ぶ。0歳から12歳まで年齢順に並べられた作品には、それぞれが付けた題名と作者のコメントが添えられていた。どんな気持ちでこの絵を描いたのだろうと想像しながら観るのが面白い。

8月26日金曜日
gallery元町にて蒼昊美術會「みんなの夏の思い出展」を観る。夏の間に行ったワークショップで参加者が制作した作品が並ぶ。小さなハガキサイズの絵の中に、花火や海、虹や雲など、思い思いの夏の風景が広がっている。描いたのは子どもなのか大人なのか、見当がつかない抽象的な表現も興味深い。水彩の豊かさを味わった。

8月26日金曜日
若葉町ウォーフにてまちなかギャラリー2022「くじらの夢」を観る。夏休みに開催したワークショップで子どもたちがアーティストの山田裕介とともにつくった作品の展示だ。6メートルを超える大きな鯨がその色鮮やかな身をゆらめかせ、空間には浮き輪や流木などが浮かぶ。海の世界に潜り込んだような涼しさを感じた。

8月29日月曜日
路上生活経験者で構成されたダンスグループ「新人Hソケリッサ!」のイベントを観に、横浜市役所アトリウムへ。彼らを追ったドキュメンタリー《ダンシング・ホームレス》の上映から始まり、最後はダンスパフォーマンスが行われた。市庁舎の屋内外を使ったダイナミックな演出と、生命力あふれるダンスに会場は大きな熱気に包まれた。

ヨコハマアートサイトとは

横浜市地域文化サポート事業。地域課題の解決にアプローチする文化芸術活動、文化芸術の持つ創造性をコミュニティやまちの活性化と結びつける活動、ヨコハマの個性ある文化芸術を市内外へ発信する活動を広く公募し、支援する事業です。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局（認定NPO 法人 ST スポット横浜、横浜市文化観光局）
〒220-0004 横浜市西区北幸1-11-15 横浜ST ビル 208（認定NPO 法人ST スポット横浜 地域連携事業部 内）
TEL:045-325-0410　FAX:045-325-0414　MAIL:office@y-artsite.org　https://y-artsite.org

@Y_Artsite　ヨコハマアートサイト　ヨコハマアートサイトに関することを中心に、横浜市内のさまざまな地域文化について発信します。

季刊ヨコハマアートサイト vol.032
発行：ヨコハマアートサイト事務局　編集：認定NPO法人 STスポット横浜　編集協力：大谷薫子　取材・テキスト：小川智紀、森崎花、田中真実
デザイン：小池佑子　撮影（表紙・特集1）：金子愛帆　印刷・製本：共進印刷株式会社　発行日：2022年9月30日
季刊誌についてのご意見・ご感想もお待ちしております。